

## 【臨床・研究】

## 島根県における新型インフルエンザ

## — サージは起きた —

いずみ 泉                      のぶ お 夫

キーワード：新型インフルエンザ，島根県，サージ (surge, 大波)，  
年齢分布，小児

## 要 旨

島根県の新型インフルエンザの流行は7月1日の第1例より漸増し、10月末に注意報レベルを超えた。さらに11月中旬より一段と増加して警報レベルを超え、12月初めまで3週間続いた。この間、特に祝・休日の医療機関は3次救急病院も含め受診患者が急増しサージとなった。この3週間の県内の届け出入院患者数は27名と全届け出の25%を占めたが、重篤患者は少なかった。定点の報告件数は過去11年で最多の2003年の1.36倍になったが、増加分の大部分を5～14歳の年齢層が占めた。島根県のこの年齢層の人口6.6万人の少なくとも45.2%が感染したと推計した。サージ時の3次救急病院における軽症患者の診療負担の一層の軽減対策が望まれるとともに、サージ回避の方策を探りたい。

## はじめに

2009年4月、メキシコに端を発した新型インフルエンザ (新型Flu) は、6月には世界を巻き込むパンデミックになった。日本も41週 (～10/11) に注意報レベル (1週間の定点当り患者数10人) を超え、44週 (～11/1) より49週 (～12/6) まで6週に渡り警報レベル (同, 30人) を超えた<sup>1)</sup>。島根県も後者を47週 (～11/22) から49週の3週間、超えた<sup>2)</sup>。

季節性ではごく少ないウイルス性肺炎の多発が特徴的であったが<sup>3)</sup>、幸いに日本では他国より重篤例やARDSは少なかった。

超警報レベル時のサージ (surge; 大波) は、医療機関や社会に甚大な影響を及ぼした。いまましても重症度が高かったらどうか、次の波、季節性Fluの流行時、さらには次のパンデミックに活かせることはないか、顧みておきたい。公衆衛生上の啓蒙や学級閉鎖は、ワクチンはいたし方がなかったが、相当に強化されたにも関わらず、サージは防げなかった、何故か。

世界や日本レベルの考察も出るであろうが、皆が経験と身近な資料に即し、自身でも考えておき

Nobuo IZUMI

出雲市立総合医療センター小児科  
連絡先：〒691-0003 出雲市灘分町613